

服部四郎の来沖

— 『服部四郎 沖縄調査日記』を読む —

今 林 直 樹

目次

はじめに

1. 『服部四郎 沖縄調査日記』
2. 琉球方言研究の実践
3. 戦後沖縄社会の観察

おわりに

註

はじめに

1955年10月2日深夜、羽田空港を飛び立った服部四郎は、翌3日早朝、自身にとっては30年来の憧れの地であった沖縄に降り立った。『服部四郎 沖縄調査日記』（服部 旦編、汲古書院、2007年、以下『日記』と略す）には次のような記述が見える。

無事着陸。外へ出るとむっと暖い。仲宗根政善氏、事務長氏出迎え、2台の自動車に分乗。外は暗くてよく見えないが、元の市街という所はほとんど家が残っていない。坂を昇って行く。首里はかなり小高い丘の上にある。（『日記』33頁。）⁽¹⁾

服部四郎（1908—1995年）は、ウラル・アルタイ語研究者として著名であるとともに琉球方言研究者としてもつとに知られた言語学者である⁽²⁾。この年、服部は、琉球大学教授で当時副学長を務めていた旧知の仲宗根政善により国文科の招聘教授として琉球大学に招かれ、初めて沖縄の地を踏んだのである⁽³⁾。

本稿は、この服部の来沖について、服部の残した『日記』をもとに、主として戦後の琉球方言研究におけるその意義について考察することを目的とする。

服部は、1908年、三重県の亀山に生まれた。1928年、東京帝国大学文学部英吉利文学科に入学するも、翌年には同学部言語学科に転科する。服部は、入学した年の11月に処女論文である「三重県亀山地方の二音節語について」を発表、言語学科に転科した翌年には「近畿アクセントと東方アクセントの境界線」を発表するなど言語への関心を深めていく。服部にとって、言語

学科への転科は自然の流れであったのであろう。

1932年、服部は雑誌『方言』に4回にわたって、「『琉球語』と『国語』との音韻法則」と題する論文を発表し、その中で沖縄の今帰仁方言を取り上げた。このとき、服部が取り上げた今帰仁方言のインフォーマントを務めた人物が仲宗根政善であった⁽⁴⁾。

仲宗根は、1907年、沖縄県今帰仁村与那嶺に生まれ、服部が言語学科に転科した1929年、東京帝国大学文学部国文学科に入学した。仲宗根は2年生のときに橋本進吉の「国語学演習」を受講し、そこで、当時、橋本ゼミに属していた服部と出会った。服部は、仲宗根が沖縄県の今帰仁村出身であることを知って、仲宗根をインフォーマントに調査を行い、その成果が雑誌『方言』に掲載された先述の論文へと結実する。仲宗根は、この服部との出会いによって琉球方言への関心を深めていき、1932年、『南島談話』第5号に「今帰仁方言における語頭母音の無声化」を発表後、1934年には『方言』第4巻第10号に「国頭方言の音韻」を、1937年には「カ行変格『来る』の国頭方言の活用について」を『南島論叢』に発表するなど、琉球方言研究者としての道を歩み始めるのである。

沖縄戦でひめゆり学徒隊を引率したことで知られる仲宗根は、戦後、沖縄諮詢会で文教部編集課長を務めたり、沖縄群島政府で文教部副部長を務めたりするなど行政面に関わっていたが、1952年、沖縄群島政府が廃止されたことにより、同政府文教部副部長の職を辞して琉球大学に赴任した。その翌年、琉球大学は当時の文部省の援助により、県外の諸大学から講師を招聘する制度を設けた。仲宗根は、この制度を利用して服部を招聘し旧交を温めるとともに、服部から琉球方言研究に関する指導を受けたいと思ったようである。仲宗根から打診を受けた服部はそれを快く引き受け、こうして、1955年10月から12月の3か月にわたる服部の沖縄行きが実現するのである。

以下、本稿では服部の残した『日記』を紹介し、戦後沖縄の琉球方言研究における服部来沖の意義について考察していきたい。

1. 『服部四郎 沖縄調査日記』

まずは『日記』について確認しておきたい。『日記』の編者で、服部の御子息である服部旦氏によると、服部没後の1997年6月19日から服部の蔵書整理が開始されたが、その最中の1999年8月から9月頃にこの『日記』が発見されたという。氏は次のように記している⁽⁵⁾。

本日記は、四郎が単身沖縄に赴任した昭和30（'55）年10月2日から同年12月26日の間、約3か月の短い期間の記録であるが、この時の四郎の活動が我国琉球方言学研究の一画期をなすことは、門外漢ながらも知っていた。従って、一読して当日記の学問的重要性、即ち、敗戦からまだ10年しか経っていない米軍政下に於ける沖縄の言語学・方言学・民俗学・社会学・

歴史学上の有益な資料であり、言語学史的にも意味ある資料であることを確信した。

氏はまた上記の確信を換言、補足して、『日記』の学問的価値として2点を指摘している。第1に、「言語学・方言学・音声学の研究調査の手法を単なる机上の論としてではなく、現地での実践によって示している」点であり、第2に、「復興途次の沖縄社会の観察記録であるから、今日の観点から眺めても当時の歴史資料として非常に興味深いものがある」という点である⁽⁶⁾。

第1の服部の「実践」については、次の3つが指摘できるであろう。すなわち、①自らが琉球方言を積極的に学ぼうとしたこと、②沖縄本島のほぼ全域を周り、可能な範囲で方言調査を行ったこと、そして③琉球大学の学生たちに方言研究に関する手法を文字通り「実践」を通して示したことである。以上、3点について、『日記』のそこかしこに服部の記述を確認することができる。

次に第2の点については、沖縄が日本で唯一の地上戦となった沖縄戦を経験し、あちこちにその傷跡がまだ残っていた当時の様子や、沖縄をそのような悲劇に陥れた米軍への怒りなどが記されている。服部が、この沖縄滞在中に米軍批判を行ったことが、外国人と思われる人物からの服部への「強い抗議と恫喝」を引き起こすことになったという⁽⁷⁾。服部旦氏によれば、それが服部をして「良く笑いお道化た振舞もして見せる愉快な一面のある父親」から「寡黙な家族に対しても容易に腹の内を見せない人間」へと変えていったのではないかというが⁽⁸⁾、いずれにしても、このこと自体もまたその当時の沖縄の様子を示していることになろう。なお、沖縄を悲劇に陥れた日本に対する批判については、『日記』には記されていない。この点について、服部がいかなる考えを持っていたかを、当時の沖縄が置かれていた状況と関連させて考察することは重要であろう。

出版された本『日記』は主として次のような構成となっている。すなわち、仲宗根政善の後任として琉球大学に赴任した上村幸雄氏（琉球大学名誉教授）による「服部四郎先生と仲宗根政善先生」と題した「解説」とそれに続く「日記本文」、編者である服部旦氏による「資料解説」とそれに続く「資料本文」、そして同じく編者による「服部四郎略年譜」である。なお、「口絵」には当時の写真が14枚と、『日記』に登場する主要な地名を記した沖縄本島の地図1枚が収められている。服部が沖縄を発つ直前の12月24日午前、琉球大学新図書館前で撮影された「写真13」には、名嘉順一の顔が見えるが、名嘉は、当時、琉球大学の学生で、この服部の来沖を機に服部と深く接することで、後に東京大学言語学科の研究生として服部の指導を受けることとなる。後述するとおり、名嘉は琉球大学琉球方言研究クラブの創設メンバーの一人となり、同クラブのメンバーを中心とする琉球方言研究を牽引し、支えることとなる。服部は後に「名嘉順一君とはどうも縁が深い」⁽⁹⁾と記したように、名嘉の名前は『日記』の中でもあちこちに散見することができるが、名嘉のように琉球方言研究を志す学生が出たこともまた服部来

沖の意義の一つとしてよいであろう。

以下、本稿では服部旦氏の指摘した本『日記』の学問的価値2点を軸に、『日記』の該当部分を紹介していきたい。なお、引用するにあたっては、必ずしも「学問的」に価値があるとは思えないような、例えば、服部の人柄をうかがわせるようなエピソードに属するものも積極的に紹介していきたいと考えている。

2. 琉球方言研究の実践

服部は琉球大学では招聘教授として「国語学」「言語学」そして「ドイツ語」を担当した。10月4日（火）の日記には、「仲宗根氏と授業の打合せをして帰る。余の講義は別紙の如し。」とあり、当時の時間割表が貼付されている（『日記』38頁）。それによると、服部の授業は月水金の週3日で、各曜日の2コマに「国語学」、4コマに「ドイツ語」、5コマに「言語学」となっているのがわかる。

講義は10月7日（金）から始まった。『日記』には次のように記されている。

10月7日（金）

初めての講義

国語学には時枝教授の『国語学言論 続篇』の批判を講義することとする。70名位聴講。

ドイツ語は関氏の初等教科書により発音から始める。60名は居る。

言語学は講義。これも60名位。（『日記』40頁）

琉球大学での講義が招聘教授としての「公式」の仕事であるが、本章における服部の「実践」は、これ以外のいわば「非公式」な場での「実践」を指す。

前述のとおり、服部の沖縄における琉球方言研究上の「実践」については、①自らが琉球方言を積極的に学ぼうとしたこと、②沖縄本島のほぼ全域を周り、可能な範囲で方言調査を行ったこと、そして③琉球大学の学生たちに方言研究に関する手法を文字通り「実践」を通して示したことの3点に整理できる。それぞれについて、『日記』の記述をもとに紹介していきたい。まず、①について。服部は沖縄に滞在するにあたり、沖縄の言葉を話せるようになりたいとの願望を持っており、そのために仲宗根に「共通日本語（標準語）の話せないお婆さんの所に下宿させて頂きたいとお願いしてあった」のだが、実際に服部が下宿したのは武富せつという名の「戦前は標準語普及運動の急先鋒であられたという老婦人」であった⁽¹⁰⁾。仲宗根は共通語が話せないと服部が困るだろうという配慮で武富氏にお願いしたとのことであったが、服部にしてみれば「その困るのがいいので、困るからこそその土地の言葉を早くおぼえるのだ。」ということになる⁽¹¹⁾。10月7日の『日記』には「今日は武富先生になるべく首里語を使って頂くよう

に願います。」(『日記』40頁)という記述が見える。

服部は日常生活の中で実際に琉球方言と接していくわけであるが、その場面について『日記』に記録されている個所には服部の内面をうかがうことのできるものもある。さしずめ、以下の記述などは、「学問的価値」というよりは、そうした点から興味深いものである。

10月5日(水)

帰途7～8才の男の子が3人ガラス玉を弾く遊びをしているのを見る。方言を使っているのだが、ほとんどわからない。

昨日昼頃、首里の山城饅頭なる看板をかかげた店に入りマンジュウを食い居りしに、40才余りの婦人二人来り方言で会話を始めた。遠いのとラジオがやかましいのでききとれなかったが、それでも方言が話されているのを知ってうれしく思った。今までに自分に話しかけられる時は日本語ばかりなので、少しがっかりしていた所だ。(『日記』39頁)

10月20日(木)

子供達が遊んでいると耳を傾けながら立ちどまる。皆方言を話しているのでうれしくなる。女学生にクマーマーヤカー<ここはどこかの意…上村>と尋ねて、タカエスデス<高江洲ですの意…上村>と答えられてがっかりする。(『日記』63頁)

10月25日(火)

70才余りの老婆が来たので、「健児の塔はどこですか」と標準語で聞いたのに方言で教えて呉れたのでうれしかった。ことにそれが全部わかったのでうれしかった。こういう事件がそれほど稀なのを残念に思う。(『日記』69-70頁)

これらの記述は、琉球方言研究者として方言に対し厳格に向き合う言語学者としての服部の姿ではなく、長年のあこがれであった沖縄に来て実際に日常生活の中に方言の存在を確認できたことによる喜びや、方言をめぐる悲喜こもごもの気持ちを素直に書き表している、いわば「無邪気」ともいえる服部の姿を示している。これらは、「日記」という他人に見せることを前提として書かれるものではない形式のために、学術論文からだけではうかがい知ることのできない服部の一面を示すことができたものといえよう。

なお、服部がより多く琉球方言に接するために劇場にも通っていたことはすでによく知られている。例えば、以下もよく知られたエピソードであるが、10月22日(土)の日記には次のようなことが記されている。

那覇劇場へ奥間英五郎一座の劇を見に行く。午後8時開演。

現代劇は稀に日本語を混ぜる外はほとんど沖縄方言。時代劇は士達が刀を1本ずつさして
いて大剣劇となる。ほとんど方言ばかり。芝居そのものは面白くないが、沖縄方言がこんな
に沢山話されるのを聞いたのは始めてだからうれしかった。但し、所々わかるだけでわから
ない方が多い。10数才の子供達でもわかるようだから、方言を話す人々は那覇でもかなりい
ることがわかる。武富先生のお話ではこういう芝居は下層の人々が見に行くのだと。（『日
記』65-66頁）

下宿先として世話になっている武富せつに劇場通いがばれて、このことがあって後は武富が
服部についてくるようになったとのことである⁽¹²⁾。

次に、②について。服部が記しているように、沖縄滞在中、仲宗根が服部を「最北の辺戸岬
から最南の摩文仁まで隈なくといつてよいほど」案内したが⁽¹³⁾、その中で服部は方言調査を実
施している。例えば、次のような記述が見える。

10月29日（土）

午前11時琉球新報社集合。久高島調査旅行にでかける。（中略）

晩に子供達に発音を教わる。[t]は喉頭化無気音でdental、それに対する無声有気音は
[tʰ]はぐき音でそりじた。ほとんど破裂させず[θ]をわたり音的に発音、舌尖は下へflap
する。[ʰΦ]もごく弱い破裂音が聞え、[Φ]はわたり音。いずれもmellow。ヒツジ (pi¹
:ʰpi⁴za¹) ツとズの違いなし。t'iriN《太鼓》、miri《水》、hiri《傷》、hari《数》（『日記』79
-81頁）

11月6日（日）

（前略）仲宗根氏が当地の高等学校の先生と連絡をとり、ベノキ（国頭村字辺野喜）の調
査が円滑に行くように手配して呉れた。（中略）

金城親吉氏の宅で調査を開始。東恩納寛朝（74才）さんと当地小学校の先生、金城親孝
氏（26才）と3人を調べる。言葉も答えも極めて明確である。アクセントもはっきりして
いて当方の問いに速答を与える。非常によいinformantsである。仲宗根氏に従えば之が当
地の気風で、最北端の奥okuの人々にもそういう特徴があると。非常に調査に協力的で
あった。1ヶ月位調査に来たら小学校の宿直室にとめて呉れるという。調査に4時間か
かった。（『日記』91-92頁）

なお、11月22日（火）の日記には、「伊平屋のお婆さんの言葉を調べに行く。名嘉君、松田君、

山里君がついて来る。このお婆さんきつすいの島生まれだけれど我々に向って言葉をやや那覇式に改めて教える傾向あり、てこずる。」(『日記』107頁)という記述が見えるとおり、調査は必ずしもすべてがうまくいったわけではないが、いずれにしても、これらの記述には方言を聞くことができ喜ぶといった「無邪気な」服部の姿はない。これらが示しているのは言語学者、琉球方言研究者として方言調査を行う「実践者」としての服部の姿であり、インフォーマントの発音やアクセントを正確に記述しようとする姿である。

沖縄滞在中、服部は『沖縄タイムス』や『琉球新報』、『琉球大学新聞』などに琉球方言に関する論考を発表するとともに、講演も行っている。講演については、それについての記事がやはり『沖縄タイムス』や『琉球新報』に掲載されているが、必ずしも意を汲んでいないとの不満もあったようである⁽¹⁴⁾。それらの中には『日記』に資料として収められているものもある。先述のとおり、そうした論考や講演に対しては思いがけない厳しい反応があったようであるが、それにも関わらず服部が精力的な活動を続けていることを『日記』に見て取ることができる。

最後に、③について。10月21日(金)の日記には次のような記述が見える。

講義後学生達5人が集って方言研究の相談をする。八重山、宮古、久米、久志、伊平屋出身の学生達。金曜日の午後4～6時にやること、段々時間をふやすこと、日曜毎に自動車で行くこと、など相談する。仲宗根氏は勿論参加される。(『日記』64頁)

この件につき付された「注1」には「琉大、琉球方言研究クラブ結成契機の最初に当たる」と記されているとおり⁽¹⁵⁾、服部が琉球大学で国語学、言語学を講じるとともに、自らが積極的に琉球方言を学ぼうとし、また方言調査を実施したことは、学生たちの中に琉球方言研究への意欲を掻き立てることとなり、やがてそれは「琉球大学琉球方言研究クラブ」の創設へと結実する。例えば、上記5人のうちの一人で伊平屋島出身の名嘉順一は、戦前、小学生の頃に「さようなら」がどうしても言えずに「マタヤー」と言ったために叱られ、それ以来、「方言は使ってはいけないもの」と思っていたが、仲宗根の「国語学概論」の授業で「方言が学問になる」ことを初めて知り、驚いたという⁽¹⁶⁾。名嘉は当時の学生の中で最も多く『日記』に登場する人物であり、服部の沖縄滞在中、最も多く服部との時間を共有し、服部から影響を受けた人物でもある。名嘉の名前が登場する個所をいくつか紹介しよう。

10月17日(月)

昼食の時間に男子寄宿舎の下の売店でうどんを食べていたら、一昨日仲宗根君と来た名嘉という学生が牛乳を飲みに来た。新聞について話す。琉球新報は軍の宣伝画報を出している位で、アメリカにへつらう傾向あり、読者も少ないと。沖縄タイムスはその点では骨があり

読者も多いと。（『日記』53-54頁）

11月8日（火）

（前略）レコードを買っている時、名嘉が来て買い物について歩いて呉れる。米人の所へ自動車運転のアルバイトに行つての帰りなりと。（後略）（95頁）

12月10日（土）

（前略）久米島で山などで男女が会うとutakakieeというのをやるそうだ。即興の琉歌のやりとりである。（中略）名嘉君に従えば、伊平屋島では男と男が歌合戦をやるそうである。これらの風習をよく調査研究することを両君にすすめる。（後略）（127-128頁）

また、次のようなことも記されている。

11月7日（月）

雨後曇り

晩に名嘉君とマカベ殿内の家に首里語を習いに行く。同君が元下宿していた家であると。60才余りのお婆さんで標準語がほとんどできない。はっきりした首里語を豊富に聞くことができた。（『日記』94頁）

これは、琉球方言を話せるようになりたいとの服部の願望が武富せつの下では難しいということで、名嘉が元下宿していた家の女性を紹介したときの日記である。これらのエピソードは、これまでに発表されたエッセーにも記されていて必ずしも新しいものではないが、服部がこれ以降、真壁ツルというこの女性の下で方言調査を兼ねてかなりの頻度で首里語を教わることになることを考えるとき、服部における名嘉の存在は大きかったといえよう。また、名嘉にとっても、この3ヶ月間、服部と親しく接したことは青春の一コマとなつたに違いない。先述のとおり、名嘉は後に東京大学言語学科の研究生として服部の指導を受けることとなるのである。

3. 戦後沖縄社会の観察

沖縄に着いた10月3日（月）、服部は琉球大学を訪れるとともに、首里や那覇の町を訪ねている。少し長くなるが、その記述を見ておきたい。

午前中琉球大学を訪れる。旧城址に、立派なビルディングがいくつも建っている。工事中の図書館はかなり大きい。その中に一室を与えられる。

学長始め諸教授に会う。学生達も先生方も陽にやけて元気そうだ。

首里は最もひどく戦禍を被った所、垣も何もない所に新しい家がポツポツ建てられているのは異様。城の石垣その他も崩れて跡かたもなし。

午後、武富氏の案内にて那覇の市街に行く。メインストリートはかなりのビルディングが盛んに建ちつつあり、商品も豊富で立派な町。田舎向けの卸商店の並んでいる通りではトラックが軒並に並んでいる。行政府の建物は4階建。4階と3階とを米軍が占領して居り、国旗をひるがえしている。両翼に立法院、最高裁判所あり。町を少し散歩して帰る。タクシーにて¥45（日本金にすればその3倍）（『日記』34-35頁）

時代背景について触れておきたい⁽¹⁷⁾。1945年3月26日、米軍が慶良間諸島に上陸して、いわゆる沖縄戦が始まった。4月1日、米軍が沖縄本島に上陸し、4月3日には軍政府が成立している。そして6月23日には牛島満率いる第32軍による組織的抵抗に終止符が打たれ、沖縄戦が終了した。日本がポツダム宣言を受諾して連合国軍に無条件降伏した8月15日、沖縄では仮沖縄人諮詢会が招集され、同日、米軍統治下の沖縄の民政機関として沖縄諮詢会が成立する。その後、沖縄の民政機関は沖縄民政府、沖縄群島政府、琉球政府と変遷し、1972年5月15日には沖縄県として日本に復帰することになる。

戦後沖縄にとって、重要な転換点となったのは1950年であった。それは2つの意味においてである。

第1に、日本復帰運動が組織的なかたちを明確にし始めたことである。この年、シーツ施政の下で初の主席公選が実現し、沖縄群島知事選挙が実施されて平良辰雄が当選した。平良は選挙運動中に日本復帰を唱え、知事当選後は復帰運動を組織的に展開していったが、その平良を支えた政党が知事選挙を機に結成された沖縄社会大衆党である。以後、同党は、1947年に結成された沖縄人民党とともに「復帰政党」として日本復帰運動の一翼を担うことになるのである。なお、1952年には沖縄群島政府は廃止され、琉球政府が成立している。

第2に、シーツ施政のもう一つの側面である基地建設が本格化したことである。但し、シーツは基地建設とともに沖縄の開発を同時並行的に行ったため、主席公選の実現とあわせてシーツ施政は「善政」と呼ばれるのであるが、これ以後、沖縄は実質的に「基地の島」と化していくのである。

服部が来沖した1955年、沖縄は琉球政府の時代であった。1950年以降、基地建設も本格化していた。そして、この時にはすでに「日本復帰」の実現を目指す方向は既定路線となっていた。この時代、日本復帰運動は米軍による異民族統治から沖縄を解放することを意味していた。こうした時代の空気あるいは雰囲気は、実際に沖縄に滞在する機会を得た服部の沖縄認識に何らかの影響を与えたであろうか。少なくとも、服部は、10月9日の日記で、沖縄戦を実施した米

軍について非常に激しい言葉で次のように非難している。

姫百合塔に詣ず。鍾乳洞の大きな堅穴。機関銃を持っていた兵隊が一緒だったとはいうが、それにしてもほとんど抵抗できないものを毒ガスを用いて殺した米軍は鬼畜というべし。

魂魄の塔 海岸との間に低い丘があり、北面は広い甘藷畑、これでは武器があっても抵抗のしようがない。兎狩りのようなもの。（『日記』43頁）

ひめゆりの塔については、いうまでもなく服部の親友、仲宗根政善が率いたひめゆり学徒隊にまつわるものであり、服部としてもどうしても訪れなければならない場所であったであろう。それだけに高ぶる感情を抑えることができなかつたのかもしれない。

さらに、10月15日（土）の日記には次のように記されている。

午前中に銀バスにて胡座に行き（¥18）、更に石川市まで行く（¥18）。帰りは大山経由にて帰る（石川からここまで¥30 一時間余）。

普天間あたりまでは、多少あれているようには思ったが、沖縄の田舎の景色を楽しむことができた。然るにそれ以北はほとんど家が立ち並びペンキを塗ったカフェー飲屋なども多く、基地化している。石川市なるもののそういう種類の家が多い。帰りは普天間から、大山、大謝名、安謝などを通ったが、米軍の建物がいずれも広々とした土地をとっているのには驚いた。住家にしても全部平屋で庭を思う存分とっている。米国内でもできないことをしている。沖縄は依存経済だというのが、余の考えでは然らず。これだけの土地を貸して居れば、それだけでも働かないで食えるはずだ。（『日記』50-51頁）

服部はこうした沖縄の風景の中に戦後の沖縄が直面している問題を見た。地獄絵図のような沖縄戦を経て米軍統治下に置かれた沖縄の姿を見た。どうしても我慢できなくなった服部は、1956年7月4日の『朝日新聞』に「日本民族の歴史の宝庫—沖縄の島々—」と題する論考を発表し、その中で「方言は全く同系統」「総て変わり果てた姿」「胸打つ戦没記念塔」「基地と貧困の対照」などと小タイトルを付して沖縄の現状を伝え、「冷淡な法律論をもてあそぶ日本人はもちろん、無理解な外国の人々にも、わたくしは、ぜひ沖縄島をくまなく、かつつぶさに視察するように勧めたい」と記している⁽¹⁸⁾。この論考が外国人と思われる人物からの服部への激しい抗議と恫喝を引き起こしたことは前述のとおりであるが、服部の人格を変えるまでになったこの「事件」の後、服部の沖縄への関心が薄らぐことはなかった。

おわりに

以上、服部の『日記』をもとに服部来沖の意義について見てきた。

服部の来沖は、戦後沖縄における琉球方言研究の画期をなすものであった。その意義を一言で要約するならば、服部の来沖によって琉球大学に琉球方言研究の種が播かれたということになるであろうか。服部を沖縄に招いた仲宗根は服部を琉球大学に招聘するに当たり、旧交を温めたいという思いと、服部から直接に指導を受けたいとの思いがあったが、それはともに叶うこととなった。そして、沖縄戦前後から琉球方言研究から遠ざかっていた仲宗根は、これを機に再び琉球方言研究に取り組むことになる。それは、やがて、仲宗根と彼の指導を受けた、例えば名嘉順一をはじめとする学生たちによって「琉球方言研究クラブ」として結実するのである。

註

- (1) 本稿では、『日記』における「日記本文」からの引用については、文中に頁数を記して示すことにし、それ以外の「解説」や「資料解説」、「資料本文」からの引用については註で示すことにする。なお、引用文については、文中に挿入された編者と校正担当者による「注」は必要な場合を除いて、引用文中からはずしてある。服部の文章をそのまま引用したいという筆者の判断によるものであり、それ以外ではない。
- (2) 筆者自身は、沖縄において使用されている言葉を「琉球語」といったように独立した言語として理解している。服部自身についていえば、「琉球語」とも「琉球方言」とも記しており、『日記』においても「首里語」といったように方言名ではなく言語名で記していたり、沖縄の言葉を「日本語」と同格に対置するような表現がみられるが、服部の中では「琉球方言」という認識へと収斂していったように思えるので、本稿では「琉球方言」と表記することにする。なお、こうした沖縄の言葉を言語とみるか方言とみるかに関する服部の認識については、安田敏朗、「『琉球語』の不在—服部四郎を軸にして—」、『近代日本語史再考Ⅲ 統合原理としての国語』、三元社、2006年、263—350頁、参照。
- (3) 筆者は、これまでも服部来沖と戦後沖縄における琉球方言研究についてまとめたことがある。例えば、拙稿、「仲宗根政善と琉球大学琉球方言研究クラブ—戦後琉球方言研究の黎明—」、『沖縄研究ノート』16、2007年、1（44）—14（31）頁。拙稿、「戦後沖縄における琉球方言研究—仲宗根政善と琉球大学琉球方言研究クラブ」、『2006東京研究大会 多言語社会研究会年報4号』、2007年、120—132頁。
- (4) 仲宗根政善に関しては、前掲拙稿に加えて、拙稿、「仲宗根政善生誕百年を迎えて」、『沖縄研究ノート』17、2008年、1（88）—10（79）頁、参照。
- (5) 服部且、「はじめに」、『日記』所収、3頁。
- (6) 同前、4頁。
- (7) 同前、3頁。
- (8) 同前。
- (9) 服部四郎、「琉球方言研究クラブの30周年を祝って」、『日記』所収、277頁。
- (10) 同前、273頁。
- (11) 同前。
- (12) 同前、274頁。
- (13) 同前、275頁。
- (14) 例えば、服部は12月2日（金）の日記に次のように記している。
「琉球新報」の記事は大体よきも「沖縄タイムズ」のは余の趣旨が全くわかっていない書きぶり。まちがいだらけ。金関氏に関する事など困る。（『日記』115頁）

なお、ここに言う「金関氏」とは人類学者の金関丈夫のことで、服部の沖縄滞在中、服部との間に日本人の言語と民族の起源に関する、いわゆる「服部金関論争」が起こった。

(15) 『日記』 64頁。

(16) 名嘉順一、「『方言』が学問になる」、琉球方言研究クラブ30周年記念会編、『琉球方言論叢』、1987年、575頁。

(17) 時代背景に関する記述については、以下の拙稿を参照。「戦後沖縄の政治と沖縄社会大衆党」、『姫路法学』第29・30合併号、2000年、94-117頁。「戦後沖縄の政治と政党」、『沖縄研究仙台から発信する沖縄学』所収、2010年、大風印刷、103-131頁。

(18) 服部四郎、「日本民族の歴史の宝庫—沖縄の島々—」、『日記』所収、258頁。